第七講　長めの文章で言いかえに注目

その1《評論》第二講　その1の続き

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ラジオで聞いた、歌舞伎の師匠の発言はその点でとても印象的だった。外国人に歌舞伎の舞を教えるとき、言葉でなんでもかんでも訊いてきて授業にならないので、三日間は質問なし、ということで、とにかく型を覚えさせた。が、また四日目になると質問の渦……。が、これがこのごろは日本人にも起こっているという。ひとはもう、習うということを知らなくなっている、理屈で先に説明を訊いてくるというのだ。

なにか身体の深い能力、とりわけ身体に深く浸透している智恵や想像力、それが伝わらなくなっているのではないか。あるいは、そういう身体のセンスがうまくはたらかないような状況が現われてきているのではないか。

そんな身体からなにやら悲鳴のようなものが聞こえてくる気がする。身体への攻撃、それを当の身体を生きているそのひとがおこなう。化粧とか食事といった、本来ならひとを気分よくさせたり、癒したりする行為が、いまではじぶんへの、あるいはじぶんの身体への暴力として現象せざるをえなくなっているような状況がある。

たとえばピアシング。芹沢俊介は、ある新聞記事のなかで（『朝日新聞』一九九五年八月三十日夕刊）、「一つの穴（ピアス用の）を開けるたびごとに自我がころがり落ちてどんどん軽くなる」という男子の言葉を引き、次のようにのべている。

「気になることというのは、彼らが自己の体に負荷をかけ続けることで自我の脱落という感覚を手に入れている点である。自分を相手にしたこの取引において、彼らは自己の体への小さな暴力といっていいような無償の負荷――フィジカルな負荷――を自分から差し出すことによって、精神的な報酬を得ている。教団という契機を欠いているけれど、私にはこれが宗教に近い行為のように映るのである」、と。

あるいは摂食障害という、食による自己攻撃。

あるいは、生理がなくなって、なのにそれがうれしい、身軽になった感じという、二十代の女性の感覚。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（鷲田清一「悲鳴をあげる身体」プロローグ）

問１　次の語群について、筆者が肯定的に使っている表現にはA、そうではない表現にはBと記しなさい。

①　言葉で訊く　　②　質問の渦
③　習う　　④　理屈で説明
⑤　身体の深い能力　　⑥　身体のセンス
⑦　自己の体に負荷をかけ続ける　　⑧　自己攻撃

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　その１　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　鷲田清一＝わしだ　きよかず（一九四九〜）京都府生まれ。京都大学文学部卒、同大学院博士課程修了。前大阪大学学長。日本を代表する哲学者。朝日新聞朝刊の連載「折々のことば」の筆者。

○芹沢俊介＝せりざわ　しゅんすけ（一九四二〜）東京都生まれ。上智大学経済学部卒。評論家。

語句

負荷＝ふか→負担や圧力をかけること

無償＝むしょう→他の目的をもたないこと。報酬をもらわないこと

報酬＝ほうしゅう→ごほうび。見返り

フィジカル→身体的

契機＝けいき→きっかけ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　長めの文章で言いかえに注目

その2《評論》第三講　その2の続き

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

観察例が一名だけである点をもって、この理論を根拠薄弱とみなしてはならない。考えてみれば、朝夕踏切で、保護者に抱かれながら列車の通過を食い入るように見守る幼児たちの姿がじつにしばしば見うけられるではないか。彼らの父母、ジジババはみなこの理論の妥当性を証言してくれるはずだ（ただしそれらの幼児たちは、ほぼ例外なく男児であるということは付け加えておくべきだろうが）。

「電車段階」において幼児がわがものとする重要な概念、それがいまも触れた「脱線」にほかならない。母親のいないあいだ、糸巻きを投げて「ある、ない」と繰り返し戯れる幼児の姿に、フロイト博士は母親の不在を象徴的に乗り越えようとする子供の無意識的心理を看取した。しかし糸巻きころがしなど、新幹線の脱線という大事に比べてなんだろう。何しろのぞみ号や白鳥号や踊り子号や、幾台もの列車を手元において管理し、青くのびるプラレールの軌道上でそれらをあやつる赤ちゃん運転士は、日々そうした大事件を身をもって生きるのである。列車たちのあるものは車体が外れて土台がむき出しの状態になり、あるものは線路の断片ごとかなたに吹っ飛び、またあるものは連結を外されてばらばらにころがっていく。またしばしば、踏切上でとんでもないアクシデントが出来したりもする。

朝、ふとんからすっくと起き上がって飛び出すやいなや、居間の床でさっそく始発列車を出発させる幼児。ふと見ると踏切のところで騒ぎが持ち上がっている。「ああっ、こんなところに、ちんかんせんが、タンクローリーが、ゴードンくんがっ」。そう驚愕のつぶやきを洩らしながら幼児は自ら、新幹線のぞみ号に黄色のタンクローリーをごんごんぶつけ、そこにさらにゴードンを突っ込ませているのだ。仮にもし現実に起こったとしたらそれは社会をゆさぶる大惨事になってしまう。ミニチュアの、そして自作自演の惨事とはいえ、しかしそうした一こま一こまは、幼児にとってやはり深い意義を持つにちがいない。

「脱線だあー」の決まり文句でしめくくられる想像上のカタストロフはその都度、天地がひっくり返るような規模の事件とし

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

て幼児の精神を揺るがし、鍛えているのではないか。父親はそんな大げさな想像をして感慨に浸る。

幼児と一緒にプラレール上で電車を動かす父親が、スピードをつけて送り出したつもりの車体を転覆させてしまうという事態もまた頻出する。そのとき幼児は父親の不手際をまじまじと見つめながら、「脱線だね」と簡潔に一言、言葉を投げかけてくる。決して相手をとがめるのではない、穏やかな事実確認の口調には、この子の生まれつきの温和な気質ばかりでなく、鉄路に生きる者としての自覚もがこめられているかのようで、なかなか頼もしい。

電車に乗るときにはもちろん最前列の車両に乗り込み、幼児を抱きかかえてガラス越しに運転席の一部始終を観察できるようにしてやらなければならない。そのガラス前の定位置では、気合の入った男児ばかりが競合することになる。

そこで子供が投げかける、食い入るような眼差しの力と、運転士に寄せる思いの真摯さを伝える作品として貴重なのは、何といってもクロード・シモンの『路面電車』である。〔中略〕

ただしここに描かれた二十世紀初頭、フランスの地方都市の路面電車と、たとえば現代の東京、京王井の頭線の電車とを比べるならば、大きな違いがある。〔中略〕フランス路面電車の運転士の「灰色のくたびれた三つ揃いの背広」だの、「裾のすり切れたズボン」だのといった服装のみすぼらしさに対する、わが井の頭線運転士諸氏のヨウカン色制服姿のりりしさだろう。むろん彼らもまた幼児の目に「権力のオーラ」をまとっていることに疑いはないが、そのオーラの重要な要素は制服なのだ。

なにしろ、それに眩惑された幼児は電車とは無関係に、工事現場の見張り係であれ、公園の番人であれ、警察官であれ、制服姿の男が向こうに見えるやいなや相好をくずし、彼を指差して「うんてんちゃん！」と連呼しながら突進していくのである。

徹底してコミュニケーションを欠くクロード・シモン的運転士像に対し、われらが井の頭線においては幼児と乗務員のあいだに実に濃密な感情の交流が成り立っている。電車を降りてなお、去っていく電車をなごり惜しく見送る幼児が手を振り続けると、最後尾のドアから半身を乗り出した車掌さんが、最後にきっと手を振ってくれるのである。その一瞬、立場や年齢の違いを超えて両者のあいだに交わされる友愛の温かさに、横で立ち会う父親はちょっと照れてしまうほどである。決して大げさにバイバイをしてみせるのではなく、白手袋の指先をひらひらと軽く揺らすだけで幼児に意を伝える車掌さんの簡潔なしぐさには、フランス語の pianoter（ピアノを弾くのに似た指の動きをする）という動詞がふさわしい。

車掌さんとのあいさつを終えて満足した幼児を乗せたベビーカーを押しながらふと考えた。なるほど幼児が運転士、車掌さん

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

に憧れるのはもっともだが、考えてみればこの僕自身、こうやって大切なお客さんを日々運び続ける運転士であり、車掌ではないか。よほどの悪天候でないかぎり、ベビーカーを押さない日など一日たりともないのだ。運転士の鑑と言ったっていい。するとそのとき、横を通る自動車に注意を惹かれている様子だったベビーカー上の幼児が、突然、うわあっと座席から飛び出すような垂直の動きを見せたかと思うと、唐突に叫んだではないか。「ぶーぶーにのりたーい！」やたらと角ばって場所ふさぎなメタリック塗装の４ＷＤ車が、ベビーカーすれすれに通り過ぎていったのだが、そのいけ好かない巨体に幼児は魅惑されたものらしい。それにしてもこれはこちらの虚を衝くひとことだった。幼児は自分の父親が自動車どころか、免許証すらもたぬ人間であることをまだ知らないのだ。父親の父親はといえば、平均寿命とくらべて長くはない一生のあいだに車を三十台近く乗り換えるという、古い言葉でいわゆる「カーキチ」だった。だから自分はもう車の運転なんかするまでもないんだと理屈をつけて、この父親は免許を取らないままの半生。

しかし実はもちろん単に面倒くさかったからのことだし、そのうえ十数年前の凍てつくような冬の夜、自転車の酔っ払い運転で悲惨なクラッシュ事故を演じてからは、自転車にさえ指を触れずにいるというのが実情である。自分の父親が決して「運転士さん」たる資格のない、自由に乗りこなせる乗り物一つ持たない男であることに、早晩子供は気づくだろう。そのとき、失望した彼の胸のうちで、かつて父親がベビーカーだけは嬉々として押し続けたという事実は、はたして何らかの意味を持つだろうか？

（野崎歓『赤ちゃん教育』）

問１　傍線部「鉄路に生きる者としての自覚もがこめられているかのようで、なかなか頼もしい」の表現についての説明として最も適当なものを次の中から選び記号で答えなさい。

① 将来、我が子が鉄道技師や運転士や運輸管理などの職業につく適性があるとわかり、その安心感を表現している。
② 他者のミスにも怒ることなく穏やかに対処し、冷静に対処する姿に、将来の鉄道マンたる資質を見出し喜ぶ表現になっている。
③ ミニチュアの鉄道で、自作自演の惨事を演出して父に見せる我が子の想像力と行動力に感服した表現になっている。
④ 「電車段階」と呼べるような幼児の心の発達段階にかかわる事例を、おおげさに表現することでユーモアを出している。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問２　次の各表現について、本文の内容と合致しているものには○、合致していないものには×をつけなさい。
①　電車の「脱線」の遊びは、幼児の精神を鍛え、成長させるなど重要な意義をもつと思われる。
②　電車の「脱線」という大惨事は、居間での想像上のこととはいえ、幼児の心に傷を残すと心配される。
③　車掌が、電車を見送る幼児に手まで振ることは過剰なサービスの上に父親の立場を奪うものである。
④　筆者自身が自動車免許をもたないのは、その父親が車マニアだったという十分な理屈がある。
⑤　電車をはじめとする大きな乗り物には、とりわけ乳幼児期の男児を引き付ける魅力があるといえる。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　その２　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　野崎歓＝のざき　かん（一九五九〜）新潟県生まれ。東京大学文学部フランス文学科卒。翻訳家、エッセイスト、東京大学大学院人文社会系研究科教授。本書『赤ちゃん教育』で講談社エッセイ賞受賞。他の著書『翻訳教育』など。

○ジークムント・フロイト（一八五六〜一九三九年）オーストリアの医師。精神分析学の創始者。

○ゴードンくん　きかんしゃトーマスに登場するキャラクター。

語句

妥当＝だとう→正しいこと。適切であること

概念＝がいねん→ことば。思想や学問のことば

象徴＝しょうちょう→ある具体的なもので抽象的なことがらを示すこと。例「ハトは平和の象徴」

看取＝かんしゅ→外見から深い意味を読み取ること

出来＝しゅったい→事件や事故が発生すること。物ができあがること

驚愕＝きょうがく→非常におどろくこと

カタストロフ→破局。物語のおおづめ

感慨＝かんがい→心に深く、しみじみ思うこと

頻出＝ひんしゅつ→よく起こること。よく出ること

不手際＝ふてぎわ→やり方や結果が悪いこと。ミステイク

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

真摯＝しんし→まじめでひたむきなこと
オーラ→独特の雰囲気
眩惑＝げんわく→何かに圧倒され、目がくらむこと
相好をくずす＝そうごうをくずす→にこやかになる
鑑＝かがみ→模範。望ましいモデル
唐突＝とうとつ→前ぶれもなく突然。だしぬけ
虚を衝く＝きょをつく→すきや油断をおそうこと
早晩＝そうばん→いずれ。遅かれ早かれ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）歌舞伎のシ匠のお話をうかがう。
①氏　②士　③史　④師　⑤資

（イ）身体に深くシン透している知恵がある。
①新　②浸　③深　④信　⑤芯

（ウ）強いフ荷を心と体にかけてしまう。
①負　②付　③不　④附　⑤歩

（エ）急な仕事で大きな報シュウを得る。
①酬　②州　③集　④収　⑤秀

（オ）体で学習せず、リ屈でわかろうとする。
①利　②李　③裡　④理　⑤里

（カ）多数の根キョを挙げて立証する。
①居　②虚　③許　④拠　⑤去

（キ）電車の模型が脱線してテン覆する。
①天　②転　③点　④典　⑤添

（ク）簡ケツなしぐさで感謝を表現する。
①決　②結　③欠　④血　⑤潔

（ケ）赤ちゃんがトウ突に叫び声をあげた。
①当　②唐　③頭　④糖　⑤登

（コ）運転免許を取得するのがメン倒だ。
①免　②綿　③面　④棉　⑤麺

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　長めの文章で言いかえに注目

その1　《評論》　第二講　その1の続き

《本文の対比構造》

主役＝筆者の見解

歌舞伎の師匠の発言

芹沢俊介の記事

なにか身体の深い能力

身体に深く浸透している智恵や想像力

身体のセンス

⇕ 主な対比

比較相手＝近年の傾向「悲鳴をあげる身体」

身体で習うより質問

理屈を訊いてわかろうとする姿勢

（例）歌舞伎を教わる人たちの近年の様子

身体の深い能力、身体に深く浸透している智恵や想像力が伝わらない

身体のセンスがうまくはたらかない状況

自分の身体への攻撃

（例）ピアシング・摂食障害

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《内容理解・選択肢》

筆者は身体レベルの深い知性を重視しています。また、身体水準で習うこと、学ぶこと、いわば身体で型を真似ながらまなぶ、〝まねぶ〟という本来の学習の在り方を大事だと考えています。ところが、近年それが失われつつある。これがこの文章の大きな対比構造です。

①の「言葉で訊く」、②の「質問の渦」、④の「理屈で説明」は、身体で習う側の正反対ですから、ことごとくＢです。一方、③の「習う」、⑤の「身体の深い能力」、⑥の「身体のセンス」こそ筆者重視のキーワードで、Ａです。

そうした「身体のセンスがうまくはたらかない」で、「身体からなにやら悲鳴のようなものが聞こえてくる」事例に、ピアシングや摂食障害などが挙げられています。これは「自己の体への小さな暴力」です。⑦の「自己の体に負荷をかけ続ける」や⑧の「自己攻撃」はこちらのよくない状況、傾向のグループです。もちろん筆者は肯定的には使っていませんから、Ｂです。

模範解答

問１　①＝Ｂ　②＝Ｂ　③＝Ａ　④＝Ｂ　⑤＝Ａ　⑥＝Ａ　⑦＝Ｂ　⑧＝Ｂ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第七講　長めの文章で言いかえに注目

その2《評論》第三講　その2の続き

《本文の対比構造・ユーモアを生むしかけ》

主役＝大げさに表現

踏切上でとんでもないアクシデントが出来
始発電車
驚愕のつぶやき
想像上のカタストロフ
大げさな想像
鉄路に生きるものとしての自覚
こちらの虚を衝くひとことだった

⇕

比較相手＝日常的な場面

居間のプラレールの遊び
「ああっ、こんなところに、ちんかんせんが……」
「ぶーぶーにのりたーい！」

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

ユーモアエッセイです。ユーモラスに笑いをとる、ニコリとさせるしかけにはさまざまありますが、ひとつは〝落差〟です。古典的コメディの例を挙げれば、偉そうに、あるいはすました上品な紳士が、道でバナナの皮を踏んであられもなく、スッテンと転ぶシーンなどです。みすぼらしい感じの人が転んでも悲惨なだけで、ユーモアの笑いは生まれません。せいぜい嘲笑です。

本文は、日常における赤ちゃんの成長ぶりを描いていますが、その表現がいちいち大げさでくすっとさせます。

傍線の「鉄路に生きる者としての自覚もがこめられているかのようで、なかなか頼もしい」もそうです。本物の鉄道ではなくミニチュア電車での遊びをめぐる子供の反応に対して、筆者である父親が「鉄路〜」などと大げさに表現しているのです。また、「電車段階」と筆者が表現しているように、子供の心理的成長のある段階（電車に夢中になることを通じて成長するステージ）をめぐってのものです。多くの男の子が、そうした成長段階を経るらしいということで、そうした男の子がかならず〝鉄っちゃん〟になるわけでも、まして鉄道関係の職に就くわけでもありません。したがって、④の「「電車段階」と呼べるような幼児の心の発達段階にかかわる事例を、おおげさに表現することでユーモアを出している」が正解です。

他の選択肢を吟味してみます。①の「将来、我が子が鉄道技師や運転士や運輸管理などの職業につく適性がある」とか②の「将来の鉄道マンたる資質」では、子供の心理の発達段階の話でなくなり、本当の鉄道関連の仕事と結び付けてしまっています。「鉄路〜」がユーモアでなくなります。比喩の誤解（比喩を文字通りに解釈した誤り）といえるでしょう。③の「自作自演の惨事を演出して父に見せる我が子の想像力と行動力」も比喩の誤解（比喩を文字通りに解釈した誤り）です。「自作自演の惨事」という表現は、たしかに本文中にありますが、本当に父親を観客として「演出して」いるわけではありません。脚本を書き上げ、それを自ら舞台で演じるかのような「想像力と行動力」はことごとく誤りです。父親はわが子を観察し、大げさに表現しているだけなのですから。さらに、この傍線箇所は父親の「不手際」についてのものです。したがって、そもそも、子供の「自作自演」についてのものでさえありません。

問２《全体の理解・選択肢・正誤問題》

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

①の「電車の「脱線」の遊びは、幼児の精神を鍛え、成長させるなど重要な意義をもつと思われる」は、「「電車段階」において幼児がわがものとする重要な概念、それが～「脱線」にほかならない」や「「脱線だあー」の決まり文句でしめくくられる想像上のカタストロフはその都度、天地がひっくり返るような規模の事件として幼児の精神を揺るがし、鍛えているのではないか」といった本文の指摘に適合しています。○です。

②は「幼児の心に傷を残すと心配される」が×です。むしろ、心の成長ですよ。記述に反する誤りです。③は「車掌が、電車を見送る幼児に手まで振ること」を「過剰なサービス」「父親の立場を奪う」などと否定的に表現していますが×です。むしろほほえましい場面でしたよね。記述に反する誤りです。④は「筆者自身が自動車免許をもたないのは、その父親が車マニアだったという十分な理屈がある」としていますが、本文には「だから自分はもう車の運転なんかするまでもないんだと理屈にならない理屈」や「しかし実はもちろん単に面倒くさかったからのこと」とありますから、×です。記述に反する誤りです。⑤の「電車をはじめとする大きな乗り物には、とりわけ乳幼児期の男児を引き付ける魅力があるといえる」これは全文を通じてその通りといえます。○です。

模範解答

問１＝④　問２　①＝○　②＝×　③＝×　④＝×　⑤＝○

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第七講　模範解答

（ア）④　（イ）②　（ウ）①　（エ）①　（オ）④
（カ）④　（キ）②　（ク）⑤　（ケ）②　（コ）③

解答漢字一覧

（ア）師匠　（イ）浸透　（ウ）負荷　（エ）報酬　（オ）理屈
（カ）根拠　（キ）転覆　（ク）簡潔　（ケ）唐突　（コ）面倒

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。